

「子ども食堂」を「子どもの居場所」として地域に広げる方策に関する研究

—— 徳島県内の子ども食堂運営者へのインタビュー調査より ——

木村直子*, 菅玲奈**

(キーワード: 子ども食堂, 子どもの居場所, 子どもの貧困対策, 子ども食堂運営者, インタビュー調査)

1. 問題意識と目的

近年、子どもの貧困は大きな社会問題となっている。子どもの貧困率¹⁾は、1985年にすでに10.9%と10%を超えており、2012年には16.3%まで上昇し増加傾向にあった(2015年6月, 厚生労働省)。2013年に『子どもの貧困対策の推進に関する法律』(2013年6月)が制定され、2014年8月に『子供の貧困対策に関する大綱』を閣議決定し、「教育支援」「生活支援」「就労支援」「経済的支援」の各分野の基本方針が示された²⁾。また2015年に「子供の未来応援国民運動」が発起され、2017年以降には全府省庁を挙げての対策が講じられたが、子どもの貧困率は未だ13.5%(2018年6月, 厚生労働省)と、高い割合で推移している。現在、「およそ7人に1人」の子どもが相対的な貧困の状況の中に暮らすと表現され、その危機感は社会の中で共有されている。「相対的貧困」とは、「その人の生きる社会において、一人の社会の構成員として機能できない状態。社会生活に必要な資源が欠けている状態」と定義され、「飢餓といった肉体的サバイバルが脅かされる状態」を指す絶対的貧困と対比させた概念である(阿部彩, 2017)³⁾。「子どもの貧困」を考える際には、生命に関わる飢餓の問題だけでなく、子どもが、子どもらしさや子ども時代を謳歌できない、現在の生活や将来に希望や夢が持てない、そういった課題に対応していくことが求められているといえる。

このような社会情勢の中、地域の中で子どもを見守る「子ども食堂」は子どもの貧困対策の一環として政府や行政の後押しもあり、近年急速に増えている。2016年に319ヶ所と報道(朝日新聞, 2016)⁴⁾されていた子ども食堂は、2019年には全国3718ヶ所となり(全国こども食堂支援センター・むすびえ, 2019)⁵⁾、3年ほどの間に10倍以上となっている。

ところで「子ども食堂」とは、子どもたちに温かな食事や居場所を提供する場である。しかし「子ども食堂」という同一の名称であっても、その実態や活動内容は個別性が高く、一様ではない。食堂の対象も子どもだけでなく、地域の大人や高齢者を対象としている場もある。したがってその表記についても「子供食堂」「子ども食堂」「こども食堂」「みんな食堂」「地域食堂」など統一されていない⁶⁾。「子ども食堂」には現在のところ法的根拠や制度的な裏付けが存在せず、住民主体の民間の活動として拡大していることも、この多様性につながっている。

昨今の「子ども食堂」のムーブメントを支える第一人者の湯浅誠によれば、「どこかの場所に地域の子どもたちが集まってわいわい食べるという現象」だけ捉えると、「子ども食堂」という言葉を使うずっと以前から、自治会の子ども活動や、公民館活動、キリスト教やお寺など宗教活動として存在し、以前なら「友達の家に行ったついでに、夕ごはんもごちそうになる」という日常生活の中で自然に行われていた共食の場と区別することができないと指摘している(湯浅誠, 2020)。各地で展開されている「子ども食堂」の活動や「子ども食堂」の始め方については、著書やメディアで多数紹介されているが(市民セクター政策機構, 2016; 豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編, 2016; 浅井, 2017; 飯沼, 2018; 小山, 2018; 松本, 2020)、「子ども食堂」をフィールドとした先行研究の蓄積は浅い(吉田, 2016; 柏木, 2017; 町田ら, 2018; 岩垣ら, 2020)。

子ども食堂に深く関係している省庁の一つである、農林水産省のHP『子供食堂と連携した地域における食育の推進』⁷⁾では、全国の子ども食堂の取組事例が紹介されており、「子供食堂」を「近年、地域住民等による民間発の取組として無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供する食堂」と説明している。農林水産省が全国の子供食堂274か所を対象とした2017年のアンケート調査⁸⁾は、子ども食堂に関する数少ない全国調査であ

*鳴門教育大学 子ども発達支援コース

**大阪市立清江小学校 教諭

る。それによると、子ども食堂の活動目的は、「多様な子供たちの地域での居場所づくり」(93.4%)が最も多く、「子育てに住民が関わる地域づくり」(90.6%)、「生活困窮家庭の子供の地域での居場所づくり」(86.5%)が多くみられる(%は、子供食堂の活動目的として意識していることを尋ね、「とても意識している」「どちらかといえば意識している」の割合の合計)。また子ども食堂の運営形態については、80.7%が自治体や社会福祉協議会の直営や委託ではない「独立した法人等による運営」で、そのうち42.5%が「任意団体」、23.1%が「NPO法人」、14.9%が「一個人が運営する」という結果になっている。開催頻度については、「月一回程度」が最も多く48.5%、2週間に1回が38.7%、週1回以上は14.2%と、多くの子ども食堂が月1、2回の開催であることがわかる。子どもを地域で育てることを目指し、月に1、2回開催され、法律や制度に依らない住民主体の活動という点で、「子ども食堂」はこれまでの公的な福祉サービスや教育サービスとは一線を画す、全く新しい価値に基づく場といえる。

徳島県では「子ども食堂」を含む子どもの居場所について、2019年5月に「徳島県子どもの居場所づくり推進ガイドライン」を策定し、県内の子ども食堂等の設立、運営を推進している。このガイドラインでの「子どもの居場所」の定義は、「『子どもの居場所』とは、地域の大人との継続的な交流ができる、子どもたちにとって安全で安心な居場所であり、信頼関係のもとでの様々な活動を行う中で、すべての子どもたちが夢や希望をもって健やかに成長していける場である。原則として、18歳に満たないすべての子どもや家庭を、地域で見守る子どもたちの居場所である。」となっている(徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドライン, 2019)⁹⁾。ガイドラインは、民間主導により展開されている「子どもの居場所」づくりの取り組みを各地域に広げ、県民、関係団体、県及び市町村が連携・協力し、持続可能な運営とする仕組みをつくることを目的としている。

子ども食堂のネットワーク形成を全国規模で行っている「全国こども食堂支援センター・むすびえ」は「こども食堂が全国どこにでもあり、みんなが安心していける場所となるよう環境を整えること」をミッションに、2025年までに全国に2万ヶ所、全小学校区に1ヶ所以上ある状態を目指して活動が推進されている。むすびえの調査(2019)¹⁰⁾では、小学校数に対する子ども食堂の比率を都道府県別に「充足率(校区実施率)」として算出している。徳島県の充足率は8.9%となっており、全国40位である。充足率が50%を超える滋賀県や沖縄県、25%を超える東京都、鳥取県、大阪府、高知県、京都府、神奈川県などと比べると、徳島県はこれから「子ども食堂」を広げていく「立ち上げ期」といえる¹¹⁾。

こういった背景を踏まえて、本研究では徳島県内の「子ども食堂」の運営や活動を支える方々へのインタビューを行い、徳島県における「子ども食堂」の実態を把握すると同時に、豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策や子ども食堂の広がりを支える方策について検討することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究では、徳島県内で先駆的に「子ども食堂」を立ち上げた方々を対象に、インタビュー調査を実施した。なお本研究で対象とした「子ども食堂」は、「子どもたちに食事を無料で提供しており、専門のスタッフが常駐している場所」とした。

(1) データの収集の手続きと調査対象者

徳島県内に子ども食堂を立ち上げ、中心的に運営している方を対象にインタビューを行った。調査対象者の概要は表1の通りである。インタビュー調査は、2019年11月から2020年1月の調査対象者の都合の良い日時と場所で、半構造化面接によって実施した。調査対象者は、徳島県内の4つの子ども食堂を運営する5名であり、調査時間は1時間から1時間半程度であった。

表1 調査対象者の概要

対象者	子ども食堂名	性別	役割	設立時期	開催頻度	利用者の概要	料金	運営形態
a	A子ども食堂	女	理事	2019年5月 (以前も試験的に実施)	平日(13:00~18:00)	近隣の子ども、家族連れ、会社勤めの男性等	子ども/無料 大人/500円	NPO法人
b	B子ども食堂	女	代表	2019年8月	月~土曜日、長期休業日(夏休み等)	近隣の小学校1~6年生(児童クラブ型)	利用申し込み時の世帯の収入状況等による	NPO法人
c	C子ども食堂	女	代表	2018年11月	月1回・第4日曜日	近隣の子ども、家族連れ	子ども/無料 大人/300円	個人
d	D子ども食堂	女	代表	2018年11月	月1回・毎月25日	近隣の子ども、家族連れ、県外から来た人	子ども/無料 大人/300円	個人
e	D子ども食堂	女	共同代表	2018年11月	月1回・毎月25日	近隣の子ども、家族連れ、県外から来た人	子ども/無料 大人/300円	別の活動をする NPO法人代表

(2) 調査における倫理的配慮

調査実施にあたって調査対象者の個人情報保護及び倫理的配慮を行うために、研究枠組みやインタビュー内容を鳴門教育大学「人を対象とする医学系研究等に関する倫理審査委員会」にて審査を受け、許可を得た。さらに調査対象者には、調査当日、研究内容と研究方法を口頭及び文書で説明した。倫理的配慮として、得られたデータについては研究目的以外に使用しないこと、個人が特定されるような形での公表は行わないこと、インタビューで知り得た情報の取り扱いには十分配慮することを説明した。また回答することにより精神的な苦痛を受けるリスクに対しては、回答したくない内容については回答を拒否したり、中断したりでき、調査への協力は自由意志であることを伝えた。さらに研究への協力とICレコーダーでの記録の同意を得て、承諾書にサインをしてもらった。

(3) 調査内容

インタビュー調査は、あらかじめ作成したインタビューシートに基づき半構造化面接で行った。インタビュー調査に使用したインタビューシートの内容及び項目は次の通りである。なお、各項目下に記載した箇条書き部分は該当項目における追加質問等である。

① 調査対象者の属性

- ・インタビュー対象者の年齢
- ・子ども食堂名
- ・子ども食堂の設立時期
- ・子ども食堂の開催頻度
- ・これまでの子どもと関わる仕事やボランティアの経験
- ・子ども食堂での役割

② どのような方が利用されていますか。

- ・利用者の年齢は？
- ・どこで知った方が来られる？
- ・だいたい決まった人が利用しているのか？
- ・どのような方に利用してもらいたいのか？

③ ここでスタッフとして働いている人はどのような方ですか。

- ・年齢の幅などどのような人が手伝いに来てくれるのか？
- ・どこでここを知って手伝いに来てくれているのか？
- ・どのようにしてスタッフを募集しているのか？
- ・ボランティアの方には来てもらっているのか？学生？大人？どのような方なのか？
- ・ボランティアの人の役割は決まっているのか？

④ ご自身が「子ども食堂」を始めよう、関わろうと思ったきっかけは何ですか？

- ・どのような手順を踏んで始めたのか？
- ・始めるときに、困ったことは何か？
- ・どのようにすれば、もっと上手なやり方で始めることができたか？
- ・始めるにあたってどのような助言や援助があればよかったか？

⑤ 「子ども食堂」を運営（関わる）するにあたって、最も大切にしていることは何ですか？

⑥ 「子ども食堂」を運営（関わって）良かったと思うことはありますか？

⑦ 「子ども食堂」を運営（関わって）困ったな、難しかったなと思ったことはありますか？

⑧ 「子ども食堂」で子どもと関わる中で嬉しいな、良かったなと思った経験はありますか？

⑨ 「子ども食堂」で子どもと関わる中で難しいな、困ったなと思った経験はありますか。

- ・配慮の必要な子ども（例：発達障害・アレルギーなど）にはどのように対応しているか？

⑩ 「子ども食堂」と地域の関わりについて、何か工夫されていることや考えておられることがありますか。

- ・学校や近隣地域とのつながりはあるか？
- ・地域の人たちの理解や協力はありますか？

⑪ 子どもたちがここを「居場所」と感じるために、何が必要だと思われますか。

- ・子どもたちや利用者には、ここでどのように過ごして欲しいと思うか？

- ・運営（関わり）を始めたときと現在で考えが変わったことはあるか？
 ⑫あなた（回答者）にとって「子ども食堂」とは、どういう存在ですか。

(4) インタビューデータの分析

半構造化インタビューによって収集した録音データは、インタビュー終了後、全て文字起こしを行い、内容を詳細に分析した。分析に際しては、カード構造化法を用いた。第一にインタビュー内容を文節に留意しながら縮約した。第二に、子ども食堂の実態や豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策、子ども食堂の広がりを支える方策に関わる内容を抽出するために、縮約ごとにカードを作成した。第三に、似た内容のカードごとに分類し、分類したグループに表札（コード）をつけた。これを小分けの表札（小見出し）とした。第四に、小分けにした表札をさらに似たグループに分類し表札（コード）をつけた。これを中分けの表札（中見出し）とした。これらを繰り返すことによって、各グループの内容を特大見出し、大見出し、中見出し、小見出しとして整理した。カード構造化法を用いた分析については、第一著者及び第二著者で行い、偏りがないように留意した。

3. 結果

半構造化インタビューによって収集したデータをカード構造化法によって整理した結果、5つの特大見出し【『子どもの居場所』が求められる社会背景】【運営に携わる人々（援助者）】【援助技術】【子ども食堂の運営について】【子ども食堂を利用する子どもの姿】を抽出した。そこで、この特大見出しの【『子どもの居場所』が求められる社会背景】を、「表2『子どもの居場所』が求められる社会背景に対する子ども食堂運営者の理解」に整理した。さらに、【運営に携わる人々（援助者）】【援助技術】【子ども食堂の運営について】を、「表3 豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策」に整理した。そして、【子ども食堂を利用する子どもの姿】を「表4『子ども食堂』で出会う子どもたち」に整理した。以下、各表に即して、大見出し『』、中見出し「」、小見出し<>を使った説明を記述する。

(1) 『子どもの居場所』が求められる社会背景に対する子ども食堂運営者の理解

【『子どもの居場所』が求められる社会背景】には、『地域の実情』『現代社会の中で暮らす子どもや家族の実情』が抽出された。

『地域の実情』としては、<移住>、<近所付き合いの希薄化>、<人口減少>などが含まれており、徳島県の実情を表した内容となっている。徳島県の人口は1999年以降、毎年減少している。2020年国勢調査の結果においても減少率4.77%で過去最大となっており、全国的にみても減少率の大きい県となっている。

『現代社会の中で暮らす子どもや家族の実情』には、「現代社会の子どもの実情」と「現代社会の家庭の親の実情」が含まれ、「現代社会の子どもの実情」として、<近くに遊び場がない>、<ゲームばかりする>、<休日の過ごし方に困る>、<子どもの食生活の問題>が抽出された。「現代社会の家庭の親の実情」としては、<共働き>、<親の忙しさ>、<虐待>、<複雑な家庭環境>、<家族の多様化>、<経済的貧困>が抽出され、社会的な孤立を生む厳しい家庭環境とその中で暮らす子どもたちの実情が理解されていることがわかる。

(2) 「豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策

豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策（表3）として、【運営に携わる人々（援助者）】、【援助技術】、【子ども食堂の運営について】を整理した。

①運営に携わる人々（援助者）

【運営に携わる人々（援助者）】としては、『スタッフ・担い手（援助者）』、『外部講師』、『学生ボランティア』、『関係機関』を抽出した。『スタッフ・担い手（援助者）』は「スタッフのなり手」であり、<募集はして>おらず、小学校のPTAや放課後教室や児童クラブでのボランティアなど、子どもに関わる<別の社会活動の経験者>や<町おこしに関心のある人>、高齢者や障害者の支援や教員、保育士など<子どもや福祉に関わる仕事の経験者>もいるが、地域をよくしたいと考える<世話好きな人>、<子どもの手が離れた人>、<生活に余裕ができた人>、<子どもへの思いが強い人>、<地域の人>が、なり手となっている。また、子ども食堂での活動に『外部講師』の先生や、近くの高校や大学の『学生ボランティア』なども関わっている。高校や大学の「学生ボランティア」の中には、将来<子どもと関わる職業を目指す学生>もいる。また「学生ボランティアの課題・問

表2 『子どもの居場所』が求められる社会背景に対する子ども食堂運営者の理解

特大見出し	大見出し	中見出し	小見出し	インタビュー内容の縮約
『子どもの居場所』が求められる社会背景	地域の実情	地域の実情	移住	移住してきた
				移住してきたので知り合いが少ない
			近所付き合いの希薄化	近所づきあいが少ない
				どんな人が住んでいるのか 顔の見える関係
			人口減少	この町は人口がだんだん減ってきている
	現代社会の中で暮らす子どもや家族の実情	現代社会の子どもの実情	近くに遊び場がない	近くに歩いて行ける公園もない
				公園に行くにも車を使う
				家の中はつまらない
			ゲームばかりする	ゲームしかすることがない子ども
			休日の過ごし方に困る	土曜日でもどこも行くところがない
			子どもの食生活の問題	最近の子どもの食事が気になる
			お家で晩ご飯を作ってもらえなかったり、朝ごはんを作ってもらえなかったりする	
		現代社会の家庭の親の実情	共働き	共働き
				共働きがすごく多い
			親の忙しさ	働いていて忙しい
			虐待	社会実情で虐待がある
			複雑な家庭環境	家族の変化
			親の再婚 ひとり親家庭	
	家族の多様化	一人ひとりの家庭が全然違う		
		いろいろな家族がある		
経済的貧困	非課税世帯			

題」として、〈学生が卒業する〉ことや、年度が替わると〈毎年継続してはこない〉ことなどがある。子ども食堂の『関係機関』として、〈防災組合〉、〈大学との連携〉、〈地域とのつながり〉、〈他の子ども食堂とのつながり〉、〈学校園等とのつながり〉、〈NPO・民間とのつながり〉、〈行政とのつながり〉など「関係機関とのつながり」が数多く抽出された。

②援助技術¹²⁾

【援助技術】としては、『子どもへの関わりの基本姿勢』、『より良い活動のための援助技術』を抽出した。『子どもへの関わりの基本姿勢』には「子どもへの関わり・対応」が挙げられ、〈見守る〉、〈臨機応変に関わる〉、〈無理強いをしない〉、〈寄り添う〉、〈個別の子ども理解に基づいて関わる〉、〈受け止める〉、〈育てたい子ども像をもつ〉が抽出された。また、『より良い活動のための援助技術』として、「記録をとる」「ミーティングをする」「計画を立てる」「他機関と連携する」「スタッフの専門性の向上」が抽出された。「記録をとる」については、〈スタッフと共有するために記録をとる〉、〈他の機関との連携のために記録をとる〉、〈子ども理解のために記録をとる〉、〈昨日（前回）とのつながりのために記録をとる〉、〈スタッフ自身の成長のために記録をとる〉が抽出された。「計画を立てる」については、〈個別の支援計画を立てる〉、〈学習支援〉、〈食事支援〉、〈生活支援〉、〈期間で目標を立てる〉など専門的に行われているところもあることがわかる。さらに、〈他機関につなぐ〉など「他機関と連携する」、「スタッフの専門性の向上」として、〈子どもの関わりの向上〉、〈子どもから教えられる〉、〈自分自身の成長〉が抽出され、子ども食堂の運営に携わる人々が、子どもや利用者への関わりに様々な工夫をして尽力していることがうかがえる。

③子ども食堂の運営について

【子ども食堂の運営について】として、『子ども食堂の立ち上げに必要なこと』、『子ども食堂を継続的に運営するための工夫』、『運営する意義や魅力』、『運営しながら感じている苦悩』を抽出した。

『子ども食堂の立ち上げに必要なこと』としては、「立ち上げる前に決めておくこと」、「子ども食堂を始める心構え」、「危機管理」の3つが示された。「子ども食堂の立ち上げに必要なこと」には〈食事の内容〉〈建物・場所〉〈利用料金〉が含まれ、「子ども食堂を始める心構え」には〈使命感〉〈タイミング〉〈声をあげる〉〈チャレンジする〉〈やりたい、やってみたいという思いをもつ〉〈見返りを期待しない〉〈行動力〉、「危機管理」には〈安全面への配慮〉〈有事の対応〉〈防災訓練〉〈食の安全〉〈衛生管理〉が挙げられた。子ども食堂を立

ち上げるにあたり、事前に決めておくことや心構え、危機管理の重要性が挙げられている。

『子ども食堂を継続的に運営するための工夫』としては、「利用促進の工夫」、「今ここを大切に継続する」、「運営に関わる一人一人を活かす」、「食事の内容を大切にすること」、「将来への展望をもつ」の6つであった。「利用促進の工夫」には、〈個別に誘う〉〈“貧困”を表に出さない〉〈イベントをする〉〈広報・宣伝・情報発信をする〉などが挙げられた。さらに「今ここを大切に継続する」には、〈この場を大切にすること〉や〈継続することの重要性〉が挙げられた。「運営に関わる一人一人を活かす」については、〈コーディネーターの役割〉、〈人とのつながりの大切さ〉、〈チームワーク〉、〈町の良さを活かす〉、〈スタッフの特技・能力を活かす〉、〈スタッフの存在の大切さ〉があった。子ども食堂の原点でもある「食事の内容を大切にすること」では、〈食の重要性〉〈充実した食事〉などが出てきた。「将来への展望をもつ」では、第二拠点を作ることや車で配送するなど今後やってみたくビジョンをもつことが出てきた。

『運営する意義や魅力』としては、「自分自身の楽しさ」、「地域から未来をつくる」、「子育て支援や社会貢献を広げる」の3つであった。「自分自身の楽しさ」には〈毎日、毎回異なる楽しさ〉があることや、「地域から未来をつくる」では〈町づくり〉〈良い未来をつくる〉こと、「子育て支援や社会貢献を広げる」には、〈社会貢献〉〈高齢者の活躍の場〉〈地域で子どもを育てる〉があった。

『運営しながら感じている苦悩』としては、「居場所としての限界」、「必要な人に支援を届けられていない」、「利用者の把握が難しい」、「資金や食材の確保」、「実施場所やスペースなど物理的な障壁」、「スタッフの問題」など、場所・人・食材・資金といった子ども食堂の運営の基礎となる部分に課題や悩みが見られた。「居場所としての限界」では〈できないことに限界がある〉、「必要な人に支援を届けられていない」では〈利用してもらいたい人に利用されていない〉〈本当に必要としている人が来ているかという不安〉〈対象者の枠を設けるか否か〉、「利用者の把握が難しい」については〈初回は大勢来てくれる〉〈定員の問題〉〈人数の把握の難しさ〉などが問題になっていた。「資金や食材の確保」については、〈資金の確保〉〈食材の確保〉の問題、「実施場所やスペースなど物理的な障壁」では、〈場所のスペースや設備の問題〉〈どこで開設するかという悩み〉、「スタッフの問題」には、〈スタッフに対する悩み〉〈スタッフの精神衛生〉〈責任の重さ〉〈スタッフの高齢化〉〈スタッフの確保の困難さ〉があった。

(3) 『子ども食堂』で出会う子どもたち

運営者が『子ども食堂』で出会う子どもたちについては、【子ども食堂を利用する子どもの姿】として、『利用者』『子ども食堂に来る子どもたちの姿』『子ども食堂に来た子どもたちが経験すること』が抽出された(表4)。

『利用者』は、「子ども」と「子ども以外の利用者」があり、「子ども」には〈小学生〉〈近くに住む子ども〉、「子ども以外の利用者」には〈子どもの家族〉〈働いている世代の人〉〈高齢者〉〈近所の高校生〉〈県外の人〉があった。子ども食堂が子どもたちやその家族だけでなく、地域の様々な世代の人の居場所となり広がりを見せていることがわかる。

『子ども食堂に来る子どもたちの姿』としては、「心理的に不安定な子ども」「偏食の強い子ども」「子どもの抱える厳しい家庭環境」が抽出された。「心理的に不安定な子ども」については〈甘えたい〉〈いろいろ言われたくない〉〈気分の浮き沈みが大きい〉〈相手によって態度を変える〉などの姿が見られ、「偏食の強い子ども」では〈食のかたより・偏食〉が見られた。また、「子どもの抱える厳しい家庭環境」では〈様々な背景を抱えた子がいる〉ことや、ひとり親家庭や親の再婚など〈複雑な家庭環境〉、家庭の中で〈我慢している〉子どもの姿などが捉えられている。

『子ども食堂に来た子どもたちが経験すること』としては、「団らんの中で食事をする」「思い思いに時間を過ごす」「社会性を育む」「安心して心地よく過ごす」「子どもの成長・変容」が抽出された。「団らんの中で食事をする」には〈食事する〉〈みんなで賑やかな団らん〉〈ご飯を喜んで食べる〉、「思い思いに時間を過ごす」には〈勉強する〉〈楽しむ〉〈遊ぶ〉〈自然の中で遊ぶ〉、「社会性を育む」には〈子ども同士のコミュニケーションを経験する〉〈様々な世代の人と出会う〉〈マナー・社会性を知る・学ぶ〉、「安心して心地よく過ごす」には〈いつでも来れる場がある〉〈誰かがいる場にいられる〉〈家みたいに過ごす〉〈ゆっくり過ごす〉〈のびのび自由に過ごす〉〈ほっとできる〉〈ストレス発散できる〉〈自分(素)を出せる〉が出てきた。これら『子ども食堂に来た子どもたちが経験している』ことは、あたり前に保障されるべき豊かな子ども時代の姿であり、子ども食堂が豊かな子どもの「居場所」となっていることを表している。さらに、「子どもの成長・変容」として、〈小さな成長・変化〉〈子どもとスタッフの関係性〉〈性格が明るくなる〉〈社会性・自立〉などが認められた。

表3 豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策

特大見出し	大見出し	中見出し	小見出し	インタビュー内容の縮約	
運営に携わる人々 (援助者)	スタッフ・担い手 (援助者)	スタッフのなり手	別の社会活動の経験者	子ども教室をやっている仲間	
				学校の放課後教室のボランティア	
				小学校のPTA	
				子ども教室をやっているメンバー	
				PTAのOB	
				専業主婦で子育てしながらPTAに関わる	
				ガーデニングクラブをしている人たち	
				自分が児童クラブにボランティアとして参加したことがある	
				子どもや福祉に関わる仕事の経験者	高齢者や障がい者に関わってきた
					高齢者の介護や障がい者の方の福祉関係の支援をしていた
			NPO法人でずっと助け合い活動や支援をしていたベテランの方		
			元保育士の経験		
			子どもへの思いが強い人	子どものことを大切にしている人	
				子どもたちへの思いが強い方	
			世話好きな人	おばさんが多い	
				おせっかいおばさん	
				世の中にはこんなおせっかいなおばちゃんがいるということを知る	
			子どもの手が離れた人	子どもの手が離れてから関わる	
			生活に余裕がでてきた人	仕事を退職した人	
				仕事にゆとりが出てきた人	
			町おこしに関心のある人	町づくりに協力してた人たち	
				この周辺の町おこしに関心のある方	
			地域の人	仕事を引退した町の人	
				近所の老人会の人	
おばさんたちは地域の方					
高齢者に趣味活動の帰りによってもらう					
子どもたちのことを知っている人に手伝ってほしい					
募集はしていない	募集はしていない				
外部講師	外部講師	外部講師を頼む	外部講師の先生		
学生ボランティア	学生ボランティア	学生ボランティア	様々な活動を提供してくれる人を呼ぶ		
			高校でのボランティア活動		
			高校のダンス部		
		大学の方にスタッフを募集			
子どもと関わる職業を目指す学生	将来、子どもたちに関わる職業をする方に関わってもらう				
学生ボランティアの課題・問題	学生が卒業する	学生ボランティアの卒業			
	毎年継続してはこない	学生ボランティアがいたが忙しいのか、今年はいない			
関係機関	関係機関とのつながり	防災組合	防災組合みたいな人と一緒にやってみたい		
			大学との連携		
			大学の先生が学習支援アドバイザー		
		地域とのつながり	大学		
			同じ地域の方とはいい方向で連携したい		
		他の子ども食堂とのつながり	地域の人と触れ合う		
			他の子ども食堂さん		
		学校園等とのつながり	中学校		
			学校との関係		
			目の前に小学校		
			保育士さんと話をする		
		NPO・民間とのつながり	ショッピングセンター		
			ショッピングセンターも協力		
			ショッピングセンターが、無償で使ってくださいと言ってくれた		
子育て支援					

				民間の法人だけではできない		
			行政とのつながり	市の子どもいきいき課の課長さん 相談の際、市の子どもいきいき課の方に話をするとサポートしてくれた 行政との連携 観光協会をつてにした 児童館 保健所		
援助技術	子どもへの関わりの基本姿勢	子どもへの関わり・対応	見守る	子どもの見守り 見守っている 上手に見守りたい もう少し見守りたい 机の下に隠れてる子どもは、その時はそっとして、でも一人にはせず、その子がどんなことをしているのかを見る 子どもたちを守る 子どもたちを守ることができる		
			臨機応変に関わる	その子のためにきつく言ったり、その子のために温かく見守ってあげたりする そのたびそのたびにそのスタッフがその子に必要な支援をする 臨機応変に子どもに関わる		
			無理強いをしない	無理にしないといけない、とは言わなくてよい 体験活動も嫌であれば参加しなくてもいい こうすればいいと押し付けるものでもない		
			寄り添う	寄り添う		
			個別の子ども理解に基づいて関わる	その子その子に合った支援をする スタッフ一人ひとりが子どもの背景を知る どんなことでどんなふうになったかという経緯を把握した上で子どもに接する 子どもは分からない		
			受け止める	素を出してくれる方が出さないより安心 受け止めてあげれるところは受け止めてあげる いいも悪いも、子どもの素を見る		
			育てたい子ども像をもつ	心の優しい、強い子になってほしい		
			より良い活動のための援助技術	記録をとる	スタッフと共有するために記録をとる	子どもの記録を引き継ぐ 新しいスタッフの方と子どもの記録を共有する 子どもと関わる前には、これまでの毎日の気づきを読む
					他の機関との連携のために記録をとる	お医者さんとか看護師さんと記録や情報を共有する
					子ども理解のために記録をとる	子ども達が帰った時間でスタッフは記録する 子どもの日々の気づきを記録する 気になったことをメモしておく 子どもの記録
	昨日(前回)とのつながりのために記録をとる	昨日どんなことがあったのか				
	スタッフ自身の成長のために記録をとる	子どもの変化に対する気づきを毎日残す 子どもの記録は自分たちの振り返りにもつながってくる				
	ミーティングをする	ミーティングをする			マネージャーミーティング 全体ミーティングを月に1,2回行う 気になる子どもについては共有しておく その子に何が必要かをみんなで話し合う	
	計画を立てる	個別の支援計画を立てる			個別の支援計画を立てる	児童個別支援計画を立てる 子どもの支援計画を立てる 確実に支援する 直接毎日支援する
					学習支援	個別学習

				学習支援
			食事支援	食事支援 来ているときだけでなく食事支援する
			生活支援	生活支援 悩みを聞く
			期間で目標を立てる	先を見通した計画を立てる 短期目標を立てる 一年を見通して食事支援と生活支援、学習支援を行う
		他機関と連携する	他機関につなぐ	他の支援先を紹介する
		スタッフの専門性の向上	子どもの関わりの向上	どんな対応をこれからしていくべきなのかを、スタッフの方が学んでいく 柔軟に対応できるようになってくるスタッフ
			子どもから教えられる	子どもたちに色々なことを教わる
			自分自身の成長	いつも発見の場 成長につながる
子ども食堂の運営について	子ども食堂の立ち上げに必要なこと	立ち上げる前に決めておくこと	食事の内容	必ずだしをとる
				ご飯・味噌汁を基本とした食事にする
				普段忙しい家庭では作れないものを作りたい
				格別いいものを提供しているわけではない
				郷土料理
			子どもの栄養	
			建物・場所	場所を決める
				建物を一から建てている
				改修によって建てている
			施設の広さに悩んでいる	
	利用料金	減免制度の対象になっている人は無料に		
		大人は300円払う		
		中学生以下の方は無料に 高校生以上は300円払う		
	子ども食堂を始める心構え	使命感	ミッション	
			一生懸命	
			思いをもっている	
			一緒に子どもたちのために立ち上げようという気概	
			子ども食堂を今やらないと思った タイミングがあってはじめられた	
		声をあげる	子ども食堂をやりたいんです、と言っていた	
			子ども食堂をしたいと言う 子ども食堂をしたいという人との出会い	
チャレンジする		迷ったら面倒くさい方を選ぶ		
		チャレンジする面白さ		
		無理じゃない やってみようという背伸びをする		
やりたい、やってみたい という思いをもつ	思ったらできる			
	したいと思う人がいればするべき			
	したいと思ったら、応援してくれる人はいる			
見返りを期待しない 行動力	見返りなんか期待してない			
	何が一番いいのか			
	わくわくという気持ち			
	どうせやるならオリジナル			
	さっとやる			
	何事もなんとなかなる			
	軽いノリで始める			
	小難しいことは考えない			
	思ったらすぐ行動する			
	まずはやってみる			
危機管理	安全面への配慮	場の安全		
		安全面に気をつける		
	有事の対応	イベント保険 なんかあればすぐ近くに人がたくさんいる		
防災訓練	防災食みたいなもの			

			防災訓練
		食の安全	食の安全 安心な食材 なるべく加工品はやめて、添加物もないものを選ぶ
		衛生管理	毎回保健所の方に電話して許可をとる 食べるものは気をつけないといけない
子ども食堂を継続的に運営するための工夫	利用促進の工夫	個別に誘う	最初は利用者が少ないので、見つけて連れてくる
			もし時間があれば来ないかと誘う
			ご飯に寄ってもらえるよう誘う
			イベントに誘う
		“貧困”を表に出さない	センシティブな問題
			周りの目や偏見を気にしたくない
			社会の偏見の目から守れる
			子ども食堂に行く人はお金がない人と言われると子ども達は傷つく
			誰でも来て良い場であると伝える
			貧困対策で子ども食堂ができたという誰にも来ない
	イベントをする	楽しい活動を考える	
		夏祭と秋まつり	
		遠足	
		焼き芋をしてくれる子ども食堂	
		鳴門金時の収穫の時に子どもたちと一緒に掘る	
	広報・宣伝・情報発信をする	学校を通してチラシを配っている	
		公園、公民館、児童館に掲示してもらう	
		チラシをコピーして案内している	
		中学校には各教室に貼れる分だけ配る	
		情報の発信	
他機関と情報を共有して宣伝してもらう			
PRする			
口コミ			
Facebookで、町の中でこんなことがあるというところなどで宣伝する			
メニューはFacebookに掲載しているが、みんな見てるのか不安			
チラシをFacebookに載せると見てくれる			
今日子ども食堂が開いてるよとSNSで発信			
今ここを大切に継続する	この場を大切に	大切にしていきたい場所	
		良かったことばかりある	
	継続することの重要性	最初は小さな力	
		定期的に	
		自然発生的にする	
		子どもに関わる支援は継続的というのが一番重要だ	
		子ども食堂のような機会が月に一回でもあればいいかな	
		毎月、今月もやった、今月もやった、これを目標にしている	
続けること			
運営に関わる一人一人を活かす	コーディネーターの役割	コーディネートする	
		全体を見て指示する	
		全体を把握する人が必要	
		つなぐ役割	
	人とのつながりの大切さ	一人ではできないので、人と支え合う	
		一人で考えてパツとしてるわけではない	
		自分一人でやろうと思ってもなかなかできない	
		一番大切なのは人	

			おばさんとの関わりはすごく心強い
		チームワーク	チームワーク 協力する 共感
		町の良さを活かす	この町の良さ 地元のを磨き上げていく
		スタッフの特技・能力を活かす	たくさんの人たちがものすごい能力を持っている 様々な経歴のスタッフがいる 色々な特技を持っている
		スタッフの存在の大切さ	スタッフは家族と一緒に
	食事の内容を大切に	食の重要性	食事が一番 食事は大事 やっぱり命に関わるのは食事だ
		充実した食事	健康なご飯を食べてもらいたい 栄養バランスのよいものを提供する しっかり食べてもらいたい 月一回でもちゃんとしたご飯を食べてもらいたい
	将来への展望をもつ	ビジョンを持つ	第二拠点への待望 ビジョン 移動キッチンカーまではいかないが、車で配送したりできたらいいな
運営する意義や魅力	自分自身の楽しさ	毎日、毎回異なる楽しさ	毎日いろいろなストーリーがある 宝物を探してみたい 人としゃべる楽しさ 確実に毎回新しく楽しいことに出会う
	地域から未来をつくる	町づくり	町づくりの一環 町づくり 田舎 町に対する思い この町がよくなること 町の中でつながりができていく
		良い未来をつくる	大変な未来が待っている 未来を素敵に変えたい 素敵な未来を作る
	子育て支援や社会貢献を広げる	社会貢献	自分のことだけでなく少しずつ奉仕する 社会に貢献する やりたい人たちが実現できるようにサポートする この町のプロデューサーになる
		高齢者の活躍の場	高齢者の元気をどこに社会貢献するか シルバーエイジの力
		地域で子どもを育てる	お母さんたちも喜ぶ お母さんが本当にこんなところがあって良かったと言う お母さんが楽 本当に良かった
運営しながら感じている苦悩	居場所としての限界	できることに限界がある	子ども食堂でできることは限られている、できないこともある
	必要な人に支援を届けられていない	利用してもらいたい人に利用されていない	自分たちの家族だけで煮詰まってしまっている人に来てもらいたい お母さんが忙しくて食べられない子たちを対象にしたい 一人でも多くの子どもたちに利用してもらいたい 小学校の最後まで支援していきたい なかなか来てほしい人に来てもらえないときもある ずっと来たらしいのにな、と思うが来ない 小さいお子さんを連れてお母さんにも来てもらいたい

		兄弟がいれば、一緒に来てもらいたい
	本当に必要としている人が来ているかという不安	本当に支援が必要な人が来ているのか 本当に必要としている子どもに食事を提供できているのか 本当に必要としている人が来ているか 本当に支援を必要としている子どもに届くような子ども食堂をやりたい
	対象者の枠を設けるか否か	校区 利用できる人の決まりがあり、その枠にあてはまる人しか利用できない 住所を非公開にしている 対象年齢の枠を広げたい どうしてもこの方は支援が必要だ、と思った場合利用できる
	利用者の把握が難しい	初回は大勢来てくれる 人がいっぱいくるようにする 初回は大勢くる 今は50人、60人来てくれる 定員の問題 20人が定員なので、それ以上は消防の関係で受け入れることができない 送迎の問題から、たくさん受け入れることができない 人数の把握の難しさ 食材が余ってしまう日がある ある程度出席人数把握する
	資金や食材の確保	資金の確保 最初は資金の問題 継続的な資金の確保 日本財団さんの助成 助成を受ける 町づくりとして、市から補助金をもらう 市の補助金 保健所に払うお金 場所を借りる費用 電気代とか水道、ガスにお金がかかる 食材の確保 食材 地元産の食材を使う 食材を寄付してもらう 食材を社協の人が提供してくれる 食材は、ボランティアスタッフに元農家が多いので、提供してくれる
	実施場所やスペースなど物理的な障壁	場所のスペースや設備の問題 場所 どういう場所がいいのかを考える 月1回場所を借りる 食料品などを貯蓄しておく場所が必要 朝早く来て冷蔵庫のスイッチをいれるのが面倒 どこで開設するかという悩み 困っていることはやはり場所 場所はすごく困っている
	スタッフの問題	スタッフに対する悩み スタッフ同士の人間関係の問題 スタッフが多いことで、悪いところも良いところもある スタッフの精神衛生 子どもの言葉に傷つくスタッフもいる 励みが必要 スタッフ一人ひとりのメンタル保持 責任の重さ 安易な気持ちで、責任が持てないのに何かするのはよくないという不安 スタッフの高齢化 高齢スタッフが多い スタッフの確保の困難さ 手伝ってくれる人をさがす ときどき手伝ってくれる人もいる 忙しい、忙しいと言いながら手伝ってくれている みんなが一人ずつ無理をせずにできればいいな 時間あるときに手伝ってくれる

表4 『子ども食堂』で出会う子どもたち

特大見出し	大見出し	中見出し	小見出し	インタビュー内容の縮約
子ども食堂を利用する子どもの姿	利用者	子ども	小学生	小学生の子ども
				小学生を対象
				小1～小6まで受け入れている
				小学生以下の人は保護者の方と一緒に来てもらう
			近くに住む子ども	子ども達も集まってくる
				周辺に住んでる子ども
		子ども以外の利用者	子どもの家族	子どもとその家族
			働いている世代の人	仕事してる方
			高齢者	70歳ぐらいの方に帰りに寄ってもらう
				近くに住む高齢者
	近所の高校生		近所のお兄ちゃんお姉ちゃんも来る	
		県外の人	地域の方にも利用してもらいたい	
	子ども食堂に来る子どもたちの姿	心理的に不安定な子ども	甘えたい	甘えたい
			いろいろ言われたくない	いろいろ言われるのが逆に苦手な子どももいる
			気分の浮き沈みが大きい	子どもたちは一日の中で気分の浮き沈みがある
				子どもと4時間、5時間一緒に過ごしても波がある
			相手によって態度を変える	子どもは大人をよく見ている
				子どもたちもよく分かっている
				なんでも許してくれそうな先生だとなかなか宿題は終わらない
				厳しい先生がいるときは宿題をすぐにする
偏食の強い子ども		食のかたより・偏食	ここにきたら野菜とかも食べなよ、と言う	好き嫌いがすごく多い
				食事が偏っている
子どもの抱える厳しい家庭環境	様々な背景を抱えた子がいる		いろんな子が入りしている	
			子どもさんも全然違う	
	複雑な家庭環境	家族の変化		
		親の再婚で子どもの気持ちは不安定になる		
		ひとり親家庭		
	一人ひとりのご家庭が全然違う			
	お家で晩ご飯を作ってもらえなかったり、朝ごはんを作ってもらえなかったり			
	非課税世帯			
	我慢している	子どもはやはり我慢している		
		家で我慢してることもある		
子ども食堂に来た子どもたちが経験すること	団らんの中で食事をする	食事する	子ども食堂を利用する子どもの姿	
				食卓を囲む
				食事提供の場所
	みんなで賑やかな団らん		みんなでわいわい言ってご飯食べる	
			月一回でもわいわい言って食べられる場所	
			みんなでわいわい言いながら食べる	
			団らんしてる	
			大人たちはテーブルを囲んで井戸端会議	
	ご飯を喜んで食べる		めっちゃおいしい	
			おいしいという声	
			毎回、ありがとうって声を掛けてくれる	
			一番励みなのは、おいしく食べてくれる	
子どもがおかわり				
空になったおぼん				
ご飯を残さずしっかりと食べる				
子ども達も喜んで食べる				
	子ども達が、楽しそうにきてご飯食べている			
思い思いに時間を過ごす	勉強する	子ども食堂できちんと勉強を教えたい		
		毎日宿題する		

	楽しむ	にこにこして帰ってくれる 楽しいことをする
	遊ぶ	子どもは遊びの天才 ショッピングセンターの中にあるから、ご飯のあと子ども達は遊んでる
	自然の中で遊ぶ	農場に遊びに行く 外の空気を吸うことも大事 公園などに遊びに行く
社会性を育む	子ども同士のコミュニケーションを経験する	子ども同士のコミュニケーション 友だちと話もできる 先生と遊ぶのではなくて、子ども同士での関わり
	様々な世代の人と出会う	色々な年代の方と一緒にご飯を食べる 子どもと地域の人と一緒に過ごす 毎日同じ場所でも、来る人が変われば全然違う
	マナー・社会性を知る・学ぶ	人との関わり方を学ぶ 外でのマナー 外に出たらあいさつをする
安心して心地よく過ごす	いつでも来れる場がある	いつでもきていいよ 出席はとらない 気軽に来れる この時間にきたらご飯を食べられる いつでもきていいよと言う
	誰かがいる場にいられる	同じ場で過ごす 同じ空気を吸ってるだけで良しとする 一人になりたいときは、一人になれる
	家みたいに過ごす	子ども食堂は家みたいなもの 運営者にとっても子ども食堂はもう一つの家 普段家で過ごすように、子ども食堂でも過ごす ここで育ったな、とかそういう風になったらいいな ここでこんな時間過ごしたなと思出すような、そういう場所ができたらいと思う
	ゆっくり過ごす	ゴロゴロしていいよ 子どもたちがゆっくり過ごせたらいいな
	のびのび自由に過ごす	のびのびと過ごせたらいいな 自由 子ども達に好きなように過ごしてほしい
	ほっとできる	居場所 居場所づくり いるところがなくて、ここにきてホッとできるのであれば来てほしい とても心がすさんだ時にでも、ここで過ごした日を思ってくれたらいいな
	ストレス発散できる	子ども達のストレス発散の場所
	自分(素)を出せる	子ども達が自分を出せる場所 機嫌悪かったら、それも出せるところ
子どもの成長・変容	小さな成長・変化	ちょっとした変化があるのが嬉しい 成長する姿を見る 子どもの変化
	子どもとスタッフの関係性	テストを見せにきてくれる 色々と話してくれるようになる
	性格が明るくなる	子どもが明るくなってくる だんだん明るくなってきている 視野が広がる 気持ちも広がる 人見知りだった
	社会性・自立	歯磨きも自分からする 何も言わなくても片付けを手伝ってくれる

4. 考察

本研究の分析によって明らかとなった結果を、研究の目的に即して（１）徳島県における「子ども食堂」の実態と豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策、（２）子ども食堂の広がりを支える方策の２つの観点から検討する。

(1) 「子ども食堂」の実態と豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策

本稿の問題意識にも記したが、徳島県における「子ども食堂」の活動は、「立ち上げ期」である。今回の調査対象者の「子ども食堂」も、インタビュー時には開設から約１年または１年未満であった。県内に前例のない中で、手探りで始めた「子ども食堂」を軌道に乗せるまでのエネルギーは計り知れないものであるが、どの対象者も労をいとわず前向きだった。

研究によって明らかになった徳島県内の「子ども食堂」の実態及び豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策は次の通りである。

- ①利用者は、近隣に暮らす小学生を始めとする子どもやその家族、さらには近隣で働く人や、地域の高齢者など、幅広い年齢層である。
- ②子ども食堂に來ている子どもたちの中には、複雑な背景を持つ子どもや心理的に不安定な子どももいる。子ども食堂で安心して心地よく、自由に過ごす中で明るくなったり、団らんを経験したり、社会性を身に付けたりする。
- ③運営に携わる援助者は、PTA活動やボランティア活動など子どもに関わる社会活動を経験したことのある人や世話好きな人であり、その仲間を中心に地域の人や、高校や大学の学生ボランティア、外部講師によって補強されている。
○地域の学校園や行政、防災組合、大学や民間団体など『関係機関』とつながりをもっている。
- ④子ども食堂における子どもたちへの関わりには、子どもたちが居心地よく過ごせるようにと、寄り添い、無理強いをせず見守るなど、個別の子ども理解に基づく臨機応変な関わりが心がけられている。
○また子どもたちが帰宅した後も、その日の活動や子どもの姿を振り返ったり、スタッフ同士でミーティングをしたりするなど、次の活動に向けた準備やより良い居場所となるための努力が重ねられている。
- ⑤子ども食堂の立ち上げには、建物や場所、利用料金、料理の内容を決め、危機管理として安全面や防災、衛生管理など事前の準備や手続きが必要である。
○また子ども食堂をやらなければという使命感や、やってみたいと思う気持ちを声にして上げることで、行動力やタイミングで始めることになる。
- ⑥子ども食堂を継続的に運営する工夫として、
 - 利用促進の工夫
多くの人に利用してもらうために声をかけたり、チラシの配布や口コミ、SNSで広報する。
 - 運営に関わる一人一人を活かす
子ども食堂の運営の全体を把握し、関係機関と連携するなどコーディネーター役割を担う運営者が必要であり、中心的な運営者と多彩なスタッフのチームワークによって、豊かな居場所が作られている。
 - 食事の内容を大切にす
子ども食堂の原点である、食事の内容を大切にす。
 - 将来への展望をもつ
例えば第二拠点を作るや、車を所有して配送するなど、自分の運営する子ども食堂の将来の展望を具体的にもつ。
- ⑦子ども食堂の運営における悩みや課題には、必要な人に支援を届けられていないのではないかと不安や利

用者の把握が難しいこと、資金や食材の確保、実施場所やスペースなど物理的な障壁、スタッフの高齢化やスタッフ確保の難しさ、スタッフの精神衛生の問題などが挙げられた。これらは、場所・人・食材・資金といった運営の基礎となる部分の課題である。

⑧運営する意義や魅力として、子ども食堂運営者の多くは課題に悩みながらも、子ども食堂から地域づくりを考え、地域で子どもを育てる明るい未来を想像し、誰よりも自分自身が運営を楽しんでいる。

(2) 子ども食堂の広がりを支える方策

今後子ども食堂を広げていくための方策としては、前述(1)の豊かな『子どもの居場所づくり』を支える、行政や学校園、民間団体などのサポート体制、地域や県民一人一人の意識改革が求められているといえる。(1)の内容と連動させて考えた具体的な方策は、次の通りである。

①近隣に暮らす子どもや家族、地域の誰もが気軽に集える場とするためには、高齢者や小学生が自分で出かけることのできる範囲(小学校区程度)に子ども食堂があることが望ましい。

②子ども食堂で過ごす子どもたちを、スタッフ以外の大人も、ともに見守ったり一緒に楽しんだりすることで、子ども食堂を核とする小さく温かなコミュニティが形成される。

③子ども食堂を運営している人は、PTA活動やボランティア活動など何らかの社会活動を経験している方々が多い。熱心に活動されている方々に、次の子ども食堂の運営者となる方がいるかもしれないと思い、学校園や行政、社会福祉協議会が積極的に声をかけ、きっかけ作りをする。

④子ども食堂における子どもたちへの関わりには、細やかな対応が求められる。一人でも多くの大人や学生ボランティアが気軽に参加できるような情報提供の機会が求められる。

○活動内容や子どもとの関わりをスタッフ同士が話し合う場に、第三者として専門家等呼び、カンファレンスやミーティングを行うことで、スタッフの精神的な負担を和らげ、より良い関わりに繋がれると考える。このような専門家による助言指導(スーパーバイズ)を受ける体制を整える。

⑤子ども食堂の立ち上げに必要なことや運営者が経験する課題や悩みをリーフレット等にまとめ、配布するなど普及活動につとめる。

○既に運営が軌道に乗っている子ども食堂の運営者を「子ども食堂」応援リーダーに任命し、新たに「子ども食堂」を始める人と繋ぐことで、開設のハードルを下げ、子ども食堂同士のネットワーク形成にも繋がる。

⑥県内の様々な子ども食堂の活動や開催日などの情報が一度に得られるサイトを立ち上げるなど、利用促進を図る。

○子ども食堂の運営には全体を把握し、関係機関と連携するコーディネーター役割を担う運営者が必要である。中心的な運営者に必要な実践知を提供する講座を実施し、新たな子ども食堂を立ち上げる運営者を増やす。

○運営が軌道に乗ると、第二の拠点を新たに開設したいと考える人もいる。そういった方々が活動の範囲を広げられるように、活動できる場所とマッチングする仕組みを作る。

⑦子ども食堂の運営には、場所・人・食材・資金といった運営の基礎となる部分に課題や悩みを抱えるところが多い。各子ども食堂の設置された地域の実情に合わせて、場所・人・食材・資金が継続的に得られるような体制づくりが求められる。

⑧子ども食堂の運営者が悩みながらも、子ども食堂から地域づくりを考え、地域で子どもを育てる明るい未来を想像し、生き生きと楽しんで運営している姿を県民や地域の方々に知ってもらうことで、地域の皆が集う場となり、誰かではなく自分たちが地域を支えるという機運を地域全体で共有できるようにする。

5. 今後の課題と展望

本研究の調査対象者は5名と少なく、調査対象とした運営者の運営する子ども食堂は、NPO 法人の方が半数を占めることとなった。農林水産省の全国調査（2017）において、運営形態は42.5%が「任意団体」、14.9%が「一個人」であり、23.1%が「NPO 法人」という結果とは少し傾向が異なる。それは徳島県が子ども食堂立ち上げ期にあり、法人格をもった経験豊富な方がこれまでの事業を拡大する形で始めることが多いと推察できる。今後は研究結果にもあったように、チャレンジしたいな、やってみたいなと考える人が、声を上げやすい体制づくりが求められる。やってみようと思った人が、一人で全てを担うのではなく、同じ思いをもつ人と協力し、また行政や関係機関と連携することで、地域の実情にあった「子ども食堂」が広がることが望まれる。

また本研究で明らかとなった【『子どもの居場所』が求められる社会背景】【運営に携わる人々（援助者）】【援助技術】【子ども食堂の運営について】【子ども食堂を利用する子どもの姿】における下位グループの内容は、「子ども食堂」を運営し、継続していくために必要な多くの知見や視点を含んだものとなっている。本稿では、その結果の一部を使い、「子ども食堂」の実態と豊かな『子どもの居場所づくり』のための方策から、子ども食堂の広がりを支える方策について考えたが、別の視点からの分析や考察も可能である。今後はこのデータを、「子ども食堂」の立ち上げや継続、広がり活用していくことを目指している。

付記

本論文で使用した調査データは、徳島県・徳島県社会福祉協議会・鳴門教育大学の連携により作成した「子どもの居場所づくり啓発パネル」にも使用しているデータである。インタビュー調査については、当時学部4年生であった菅玲奈さんとともに行ったものである。

謝辞

本論文で使用したデータは、徳島県内の子ども食堂運営者の方々へのインタビュー調査を元に記述している。調査実施にご協力頂いた方々に心より感謝申し上げます。また調査研究実施にあたり、サポートを頂きました徳島県未来創生文化部次世代育成・青少年課こども未来応援室及び徳島県社会福祉協議会・子どもの居場所づくりコーディネーターの金平和江さま、前野智英子さまにこの場でお礼を申し上げます。

注) 引用文献等

- 1) 子どもの貧困率とは、相対的貧困の状態にある18歳未満の子どもの割合を指す。相対的貧困とは、国民生活基礎調査のデータをもとに、国民を可処分所得の順に並べ、その中央値の半分以下しか所得がない状態を指す。
- 2) 「子供の貧困対策に関する大綱」は5年を経て2019年12月に改定されている。
<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/r01-taikou.pdf>（2021年9月アクセス確認）
- 3) 阿部彩「子どもの貧困問題への社会科学的アプローチ」、学術の動向、22巻（10）、8-13、2017
- 4) 朝日新聞、2016年7月2日付朝刊：319カ所は、2016年5月に朝日新聞が各地の子ども食堂のネットワークや団体に聞き取り集計した数である。
- 5) 「全国こども食堂支援センター・むすびえ」が、2019年6月に各地域のこども食堂ネットワークや自治体等に問い合わせ調査を行った結果である。引用元は、全国こども食堂支援センター・むすびえ、湯浅誠編、『むすびえのこども食堂白書地域インフラとしての定着をめざして』、49、2020である。
- 6) 本論文では、「子ども食堂」と表記する。ただし、著作物や引用部分については、引用元の表現をそのまま使用する。
- 7) 農林水産省 HP『子供食堂と連携した地域における食育の推進』
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kodomosyokudo.html>（2021年9月アクセス確認）
- 8) 農林水産省「子供食堂向けアンケート調査結果一覧」（2017年度）
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kodomosyokudo-40.pdf>（2021年9月アクセス確認）
- 9) 徳島県『徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドライン』（令和元年5月29日策定）

- 10) 全国こども食堂支援センター・むすびえ, 湯浅誠編, 『むすびえのこども食堂白書地域インフラとしての定着をめざして』, 48-53, 2020
- 11) 朝日新聞デジタル「広がる「子ども食堂」, 全国2286カ所 2年で7倍超」浜田知宏(2018年4月4日)では, 「こども食堂安心・安全向上委員会」が2018年に全国の社会福祉協議会に聞き取り調査をした結果, 子ども食堂の最少は徳島県(7カ所)と報道されている。
- 12) 子ども食堂の活動は, 社会福祉活動とは一線を画しているため, 【援助技術】という言葉が適切かという議論があるが, 抽出された内容は, 運営者のこれまでの社会経験や専門的知識, 実践知に基づく技術であるといえるため, ここでは「援助技術」とした。

文献

- 浅井春夫『子どもの貧困』解決への道実践と政策からのアプローチ』, 自治体研究社, 125-138, 2017
- 阿部彩『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波新書, 2008
- 阿部彩『子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える』岩波新書, 2014
- 飯沼直樹『地域で愛される子ども食堂づくり方・続け方』, 翔泳社, 2018
- 岩垣穂大, 長瀬健吾, 扇原淳「子ども食堂の役割および継続的な運営に関する研究」, 『日本の地域福祉』, 33巻, 25-36, 2020
- 柏木智子「[子ども食堂]を通じて醸成されるつながりの意義と今後の課題—困難を抱える子どもの参加と促進条件に焦点をあてて—」『立命館産業社会論集』53(3), 43-63, 2017
- 栗林千絵子ほか「特集 深刻化する子どもの貧困 子ども食堂を作ろう!」, 季刊『社会運動』市民セクター政策機構編, NO421・1, 86-137, 2016
- 子どもの貧困白書編集委員会『子どもの貧困白書』明石書店, 2009
- 小山訓久『親子カフェのつくりかた:成功する「居場所」づくり8つのコツ』, 学芸出版社, 2018
- 島村聡・金城隆一・鈴木友一郎・稲垣暁「子どもの居場所等の意義と関係機関等との連携に関する研究—居場所等の機能に着目して—」『地域研究』20, 155-165, 2017
- 全国こども食堂支援センター・むすびえ, 湯浅誠編, 『むすびえのこども食堂白書 地域インフラとしての定着をめざして』2020
- 豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著『子ども食堂をつくろう!:人がつながる地域の居場所づくり』明石書店, 2016
- 町田大輔, 長井祐子, 吉田亨「実施者が評価する子ども食堂の効果:自由記述を用いた質的研究」『日本健康教育学会誌』26巻(2018)3号, p.231-237, 2018
- 松本学「子ども食堂の今とこれからの役割について」『子ども支援とSDGs—現場からの実証分析と提言』五石敬路編著, 明石書店, 132-158, 2020
- 湯浅誠『なんとかする子どもの貧困』, 角川新書, 2017
- 吉田祐一郎「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた—考察—地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて」『四天王寺大学紀要』62, 355-368, 2016

**Research on Steps to Create Kodomo-Shokudo
(Special Cafeterias for Children) as Local Places for Them to Be
— From Interview Research with Managers of Cafeterias
for Children in Tokushima prefecture —**

KIMURA Naoko* and SUGA Reina**

For this research, we conducted interviews with managers of cafeteria for children in Tokushima Prefecture. While we ascertained details about these cafeterias in Tokushima Prefecture, our goal was to deliberate on strategies to expand upon these cafeterias for children, and details of how they should serve as a beneficial place for children to be. The interviews, conducted from November 2019 through January of 2020, featured five managers of four cafeterias for children in Tokushima Prefecture.

Data collected through semi-structured interviews was compiled into memory card format, organized systematically, and grouped into the following five topics: 1) social background necessitating a place for the children to be, 2) individuals managing the cafeterias (providing assistance), 3) social work skills, 4) child cafeteria operations, and 5) the kind of children utilizing these cafeterias. Based on detailed analysis, we examined the circumstances of these cafeterias for children and their role as a place for children to be, making concrete recommendations on strategies to popularize these cafeterias in regional communities.

*Department of Early Childhood and Special Needs Education, Naruto University of Education

**Kiyoe Elementary School in Osaka-shi